旭ヶ丘キリストの教会
主日礼拝順序
２０２４年９月８日

司会：千田俊昭
奏楽：千田祥子

黙　　祷		一　同
讃　　美※	聖歌３１９「牧主なる主よ」	一　同
主の祈り※	（聖歌表扉または讃美歌564番をご覧ください）	
讃　　美	聖歌５３８「ただ主を」	一　同
教会学校	「主は私の光だ」	牧　師
讃　　美	聖歌６０７「御霊は天より」	一　同
聖書朗読	使徒行伝13:26-32	
奨　　励	使徒行伝の福音(第44回)	牧　師
主　　題	**「パウロによる私達への福音」②**	
讃　　美	聖歌181「神より生まれし者よ」	一　同
献　　金	献金と感謝の祈り	
聖　　餐		
頌　　栄※	聖歌376「父、御子、御霊の」	一　同
祝　　祷※		牧　師
来週の箇所	創世記第28章	

※印のところでは御起立下さい。

☆　はじめて集会においでの皆様。心から喜び、感謝してお迎え申しあげます。しかし、初めての方に無理な勧誘をするようなことは、一切いたしません。むしろ、そっとしておきたいと思うわけです。その態度を冷淡や不親切と誤解なさらないで下さい。
☆　私たちは何派にも属さないクリスチャン個人の自由な交わりの教会です。聖書を学び、キリストに信頼し、キリストが与えてくださる神の義を何より大事にし、信じる者同志が兄弟姉妹として受け入れ合う群れです。
☆　献金は神への感謝として、各自が自由意志で行うものです（２ｺﾘﾝﾄ9:7）。入り口に献金箱がありますので、どうぞご利用下さい。
☆　キリスト教について、あるいはどんな質問でも、いつでも遠慮なく牧師にご相談下さい。
☆　第二礼拝後、軽食を用意してありますので、お時間のある方はどなたでも、ご自由にお召し上がり下さい。
☆　二階に教会図書がありますので、どうぞご利用下さい。

旭ヶ丘キリストの教会 ニュース

《今週の歩み》
９／８（日）聖日礼拝
／９（月）
／10（火）
／11（水）13：牧師祈り会
／12（木）10：00祈り会
／13（金）10-12：OBSｸﾗｽ
／14（土）13-16子供ｵｰﾌﾟﾝﾊｳｽ

《祈りの課題》
①家族の救いのために
②礼拝に来れなかった人々のために
③教会学校の子供たちが救われますように

良書ハイライト

「迫害を超える布教」

真木由香子著「親鸞とパウロ」(新教出版,1988)p.27-29

親鸞、パウロがそこによって立った救済は、従来の伝統的仏教ないしユダヤ教から峻別（しゅんべつ）されるものであり、旧宗教とは必然的に摩擦を生ずる。親鸞は次のように悲憤慷慨する。「浄土の真宗は、証道今盛りなり。然るに諸寺の釈門、教えに昏（くら）くして真仮の門戸を知らず、洛都の儒林、行に迷ふて邪正の道路を弁まふることなし。」

パウロも言う、**「ユダヤ人はしるしを請い、ギリシヤ人は知恵を求める。しかし私たちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝える。このキリストは、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かな者である。」**（Ｉコリント1:22,23）

彼らはその救済が旧宗教者から承認されないことを憤っているのであるが、旧宗教者から見れば、それらは自らの救済論理を破壊する邪義に他ならず、糾弾されてしかるべきものである。加えて、親鸞・パウロの主張は、従来の倫理道徳を無化するかのような脅威を支配者に与える。秩序の理念的崩壊は、現実的秩序の崩壊を導く元凶である。旧宗教者の与える秩序論理に支えられて維持されてきた支配権力が、旧宗教と手を携えて、これらの新しい救済思想の弾圧に臨んだのも故なきことではない。

親鸞は「興福寺の学徒、太上天皇、今上聖暦承元丁卯歳(1207年)仲春上旬の候に奏達す。主上臣下、法に背き義に違し、忿(ｲｶﾘ)を成し怨(ｳﾗﾐ)を結ぶ」と記録したように、旧宗教と国家権力によって三十五歳にして遠流となり、その後もたびたび出された念仏停止の宣下の中、苦難の生を生き抜いて行った。

パウロは「ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度」(Ⅱコリント11:24,25)等々述べられる通り、何度も投獄され、数えきれぬほどの迫害を旧宗教と国家権力から受けた。

親鸞とパウロの信には、**絶対他者**（**阿弥陀/キリスト**）が死を賭すほどに、一人の人間、一人の私のために働いてくれたという深い関係性が貫いているがゆえに、彼らは迫害にもかかわらず、その恩に報い、絶対他者の為に生きようと決意する。親鸞はその自然の情をこう詠う「如来大悲の恩徳は　身を粉にしても報ずべし」。

パウロもまた、熱い想いに駆られて言う、「生きている者がもはや自分のためにではなく、自分のために死んで甦った方のために、生きるためである」(Ⅱコリント5:15)。

報恩、それは具体的に言えば、阿弥陀仏、イエス・キリストの願いである万人の救済を目指しつつ、自らの生に生起した救いの出来事を広く宣べ伝え、そういう仕方で絶対他者の救いの働きに参与共働する、ということである。親鸞は阿弥陀の救いを広めるべき事を次のように詠っている、「他力の信を得む人は仏恩報ぜんためにとて　如来二種の回向を十方に等しく広むべし」。実際に親鸞は遠流赦免後、遙か東国の地で布教に邁進し、人生の盛りをそれに献げ、帰洛後もまた著述活動を通して念仏の仲間を導き続けた。

パウロも**「この福音は天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、それにこのパウロが奉仕しているのである」**(コロサイ1:23)と、宣教に挺身する。「全世界」すなわちローマ版図全域に福音を宣べ伝えるために、三度も地中海地域へ死の危険を冒して赴き、遂にエルサレムで捕らえられ、ローマでの殉教に至ったのである。